

『 訓練の効果 』

学校教育の中で「訓練」と名の付く活動は、避難訓練、集団下校訓練くらいかなと思います。

これらは、どちらも、児童生徒の安全確保が目的で行われます。子どもの命に関わることで、いざという時に、短時間で安全・確実に目的を果たすための合理的な行動が求められます。この取組の目標は「自分の命を守る。ひいては、その行動が他の命を守ることにつながる」という極めて理解が得られやすい内容ですので、事前指導の肝は、求められる行動の内容とその意味の理解及び順序通りに確実に行動がとれるようになることです。

さて、「避難訓練」では避難場所に子ども達を移動させた後、教員がすべきことは概ね理解されています。つまり、避難が無事に完了したことを現場責任者に報告するということです。「〇年〇組、本日の出席〇名。全員います」等。

ところで、避難場所に移動させた際に、子ども達に出すべき大事な指示があると私は思っています。それは、「その場にしゃがませる（かつ無言を維持）」ことです。この指示は、避難訓練の事前指導において指導しておくことがタイミングとしては良いと思います。そうであれば、指導する教員も、指導される子どもも、そのことを意識できるからです。

通常、避難時は、教員が子ども達の先頭になり、避難場所へ誘導します。ここで、上述のような事前指導がなされない場合、かなりの頻度で、避難場所にたどり着いた子ども達を立たせたままにしてしまいます。そして、そのまま人数の確認に入ります。この時の教員の視野には、ほぼ確認する直近の子ども顔しか入っていません。列全体の子どもの顔や様子が把握できないのです。また、立たせたままですと、しまいには「列を乱すな」とか「体を動かすな」など、 unnecessaryな注意が生じる可能性があります。注意を受けた子どもは、なんかもやもやした気持ちが残りますし、状況によっては指導者への不満につながる可能性もあるのです。

緊急時の行動ですから、不測の事態が発生しているかもしれません。子どもの命を守るというのなら、誘導してきた子ども達の状況の概要を、瞬時に把握しておくことは大事です。表情や動きに違和感があったら、人数の確認後、速やかに気になる子どものそばに行き、状況を確認するのです。その後、現場責任者への報告となります。

以上のように、「避難場所にたどり着いた順にしゃがむ」という行動には、“①誘導してきた教員が子ども達の全体の様子を瞬時に把握できること。②しゃがんでいる（または、体育座り）ことで列の乱れはほぼなくなり unnecessaryな注意をしなくてもいい。③現場責任者が全体の避難状況を迅速に確認できる。”という利点があります。さらに、立ったままよりも体への負担は軽減されます。これは、子ども達の集中力の維持につながります。

前置きが長くなりましたが、行動の意味を理解した上で場数をこなす。実施のたびに評価・改善を行う。結果、行動に要する時間が短縮されるとともに行動の質が向上します。これは、大きく見れば、「育てる」ことなのでしょうが、あえて私は、「訓練」によってもたらされた望ましい結果と押さえています。このような視点で教育活動を見ますと、けっこう「訓練の効果」が得られる場面があるのです。

例えば、小学1年生。

入学当初から約1か月。1年生が学校生活を送る上で困らないように、あるいは気持ちよく過ごせるように、実に多くの行動が求められます。靴箱の使い方。朝、教室に入ってから行動（帽

子や上着を所定の場所にかける。ランドセルから学習用具等を机の中に入れる。その後、ランドセル等はロッカーに収める等）。水飲み場やトイレの使い方。廊下や階段の歩き方。授業と授業の間の時間の過ごし方。休み時間の過ごし方。チャイムが鳴ったら授業が始まるので、その少し前には着席しておく。発言する時の約束。筆記用具の持ち方や使い方。給食の準備の仕方や片づけ方及び食べ方等々。まだまだあると思いますが、小学1年生が、決して長くはない期間で、できるように求められる行動は、本当にたくさんあるのです。

これらを、意図的・計画的に指導していくのです。求められる行動の意味（何のために）を理解させる（ここにも工夫が必要です）。そして、やらせてみる。その後、評価する（良いところ・より努力が必要なところ）。これを繰り返し、的確かつ円滑に行動できるようにします。

「1年生だから・・・」と侮ってはいけません。上述した求められる行動が身に付かなかっただうなるか？まずは、「できる or できない」という個々の差が広がります。これが何を意味するか？身に付いていない子どもには、個別の指導が必要になります。個別の指導を要する子どもが多いと、担当教員が個別の指導（ここでの個別指導は、学習内容の理解にかかわるものではありません。学校生活上身に付けておく必要がある行動に対してです）にかける時間と労力が増大することになります。結果、授業に影響してきます。学級経営にも影響してきます。いつまでたっても、だらだらとしまりのない雰囲気の中で、学校生活を送る状況が生まれます。授業の基本である一斉指導に支障が出てきます。最悪は、学級経営が困難な状況に陥ることもあるのです。

「できて当たり前でしょ」と安易に構えてはいけません。緻密に、段階的に、鍛えていくのです。1年生の目線で見ると、担当教員から指導される行動は、初めてのことであり、乗り越えなければならない目の前の壁なのです。1年生は、入学後しばらくは、毎日が「挑戦の連続」なのです。そして、「できた！」「身に付いた！」となった時には、成就感を味わっているのです。そのような様子を見逃さずに担当者は認めたり褒めたりするのです。この過程が繰り返されると、プラスの循環となり、個と集団が成長していきます。

例えば、日々の授業。

目標の実現に向けて、学習活動が展開されるのですが、ここにも、教科書には載っていない求められる行動があります。人の話を集中して聞く。聞きながら質問や疑問をメモする。発言の仕方。適度な筆圧と速さである程度丁寧に文字を書く。ペア交流のやり方。グループ内で話し合う時のやり方。全体で話し合う時のやり方等々。教科によって、さらに求められる行動が加わります。

この場合も、指導者が、授業を成立させるために、どのような行動が必要かについて捉えていなければ、これらの指導はできないと思います。そして、これらの行動も、私は、小学1年生が様々な行動を身に付けていくことと同じような過程で獲得していくものと考えます。この視点を持っており具体的に取り組んでいる方の授業は、テンポが良く、時間配分も的確で、予定通りに進みます。子ども達にとっては、満足感が高い授業につながっていくものと思っています。

私が、教育活動の中に「訓練の効果」を明確に意識したきっかけがあります。今から30年ほど前、ある先輩教師（中学校国語）の言葉がきっかけになりました。「先生、学校には二つの機能があるんだよ。一つは、育てる。もう一つは、訓練する」「最近、訓練することがおそろかになっている」ここまでしか先輩が話された内容は記憶に残っていないのですが、私は、この先輩の言葉を聞いた時、素直に共感したことは鮮明に覚えています。

私は、後年、「訓練」とは言わず、「鍛える」という言葉を使うようにしています。「訓練」という言葉から「ただ厳しい」とか「有無を言わさず」等、負のイメージを持たれる可能性があり、その都度、補足説明が必要になるかもしれないと思ったからです。ただ、「鍛える」の意味の中核には「訓練による効果」がはっきりとイメージされています。